

—〈紹介〉—

李鴻章と「文明開化」

—若尾正昭著『清朝・大官の幻影』を読んで

(東京大学) 並木 頼寿

以前、中国研究所の評議員をつとめられた若尾正昭氏が、今年（1997年）の初めに透土社から、二冊目の歴史小説を出版された。最初の作品は、天安門事件のあった1989年にPMC出版から発行された『南京雨花台——太平天国の乱異聞』である。

著者のプロフィールに紹介されているように、若尾氏は、大学の卒業論文のテーマに「湘軍の研究」を選んだ。湘軍とは、いうまでもなく、太平天国の反乱に対処するために曾国藩によって作られた郷土防衛的な武装集団の名前である。

若尾氏の最初の作品は、その湘軍の中堅幹部である羅逢元という人物を主人公に、太平天国期の中国を描いたものであった。

今回の第二作は、湘軍にならって淮軍を作り、曾国藩の後継者として清末の国内政治および国際交渉を牛耳った李鴻章を主人公にしている。太平天国時期から清末・民国初期にかけての中国社会の変容を研究テーマとしている私には、これら二冊の著作は、いずれも大変興味深く、また、啓発されるところの多い作品である。

前作の「あとがき」に、なぜ卒業論文で「反革命側」の湘軍をとりあげたかについて、著者の説明がある。太平天国は農民革命軍だから正しいという戦後正統左翼の歴史学の見解にたいして、著者は、「革命の目的の一つであった工業化は未だに達成できず」、今も足踏みをつづけているのはなぜか、という疑問をいだいた。

むしろ、「曾国藩の湘軍、続いて李鴻章の淮軍と北洋軍閥から蒋介石に至る流れの中に、謀反人と組んで中国の独立を保ち民族産業資本を育てる動きが、早い内からあった」のではないかと著者

は、日本の明治維新が徳川幕府要路の協力によって実現したと考えられることをてがかりとしながら、湘軍の歴史を卒論のテーマとしたという。

その後、若尾氏は、プロフィールに紹介されているように、日中貿易関係の商社につとめ、日本国際貿易促進協会の事務局での仕事を経て、1959年ソニーに入社し、アジア・中近東を対象としたセールスを担当した。そしてソニーで、社長室渉外スタッフ、総務部長、をつとめて、1981年には取締役となり、1985年から2年余り、中国代表として北京に駐在し、1987年に取締役を退任してソニー教育振興財団専務理事の仕事に就かれた。前作は、ソニー中国代表として長期間北京に滞在されたあと、発表されたものであった。

実務のなかで中国の近代化の問題を追求してきた若尾氏は、湘軍の歴史の中にも、「請負い型の官僚気質や、軍隊の私物化、法律の軽視」が見られ、さらに国民国家の意識の欠如があったこと、そのような傾向をもたらし「伝統文化」の重さは、日本人の場合とは比較にならないほどのものであることを、痛感したという。中国に長期滞在して、こうした問題意識に直結する歴史的な遺物や風景に接し、若尾氏は、歴史小説のかたちで考えたためた事柄を明らかにしようとされたのである。

この第二作の主人公は李鴻章であるが、重要な登場人物は、曾国藩、李鴻章、丁日昌の三人である。作品は、以下の五〇章からなる。1、李鴻章の出自、2、第一の挫折、3、第二の挫折、4、第三の挫折、5、官軍の組織、6、イギリスの北京占領、7、権力空白、8、西太后クーデター、9、南京か上海か、10、上海救援、11、三軍戦略、12、イギリスの清朝支援、13、長江下り、14、常勝軍、15、科挙秩序、16、カオス、17、以夷制夷、18、ゴードンとハート、19、蘇州八王惨殺、20、合肥回復、21、天京陥落、22、裁兵・隠逸、23、天子と官と吏と民、24、僧王戦死、25、紫禁城内宮、26、西太后、27、宮中と府中、28、日本人、29、

中華と夷狄, 30, 賄賂と贈答秩序, 31, 中体西用, 32, 哥老会, 33, プロシャ艦の音楽会, 34, 待つことだ, 35, 淮軍北上, 36, 曾国藩の水師閱兵, 37, 馬新貽, 38, 武昌の四将, 39, 天津教案, 40, 水師章程, 41, 馬新貽刺さる, 42, 常州の変, 43, 土を削る, 44, 日清通商条約, 45, 曾国藩死す, 46, 日軍台湾上陸, 47, 丁日昌六条, 48, 台湾開拓, 49, 丁日昌没す, 50, 終章。

この目次を一見して、太平天国以降、一九世紀後半の清朝をめぐる政治的な激動が描かれ、また、中国の伝統文明と伝統的な価値観が、西洋の軍事力や工業・技術力に裏打ちされた全く別種の普遍的な文明と遭遇するという、空前の状況のなかで、曾国藩や李鴻章などが清朝体制のなかで大官としての立身をはかりながら、こうした新奇な事態に対処していったさまが描かれていることがわかる。

終章で、著者は、李鴻章の一生を振り返って、「昔、中国では、四十歳を不惑と言った。よく修行した男の生き方はこの頃までに定まり、動揺しなくなる。李鴻章がそうであった。絶えることなく継起する諸勢力を相戦わせ、操縦して、先送りする、絶妙な手腕を発揮した」と述べる。さらに著者は、清末の内憂外患のなかで、洋務自強の試みは遅々として進まず、列強に瓜分される事態となったにもかかわらず、「西太后と李鴻章の意気は常に旺盛であった。困難を楽しんでいる如くであった」という描写を加えている。

李鴻章は、外国との交渉や、具体的な近代化事業の担い手として、広東出身の実務家丁日昌を重用した。著者は、丁日昌を、西洋人の交渉技量を身につけ、「中体」への執着がなく、「西体西用」こそ今後の中国の進むべき方向と考える人物として描く。そして、日清戦争後の三国干渉で遼東半島が返還された場面で、李鴻章に、遠い昔を振り返るように「昔、丁日昌という男が、台湾は大切だと、盛んに説いていたな」という回想のことは

を漏らさせる。李鴻章のなかで、「西用」すなわち「洋務」が、ついに「中体」とその座を交替することがなかったことを、象徴的に示す場面である。

本書に「序文」を寄せた小島晋治氏は、かつて世界に冠たる繁栄を誇った中国に、その繁栄ゆえの爛熟が生み出した人口増加と遊民の激増、そして反乱がおこり、さらにアヘン戦争敗戦ののちには外圧が強まり、衰退の状況が生まれたにもかかわらず、「これを中国のエリート層が、日本のそれのように「世界の大変化」の所産とみなし、「文明開化」に狂奔する契機となし得なかったのは、中国の歴史を考えれば無理からぬことではあった。「文明開化」ということばは当時の中国にはなかった。中国文化は彼らにとっては、二千年にわたって唯一無二の文明だったからだ」と述べている。日本では西洋を「文明」ととらえたが、中国では、「文明」は中華にこそあって、西洋は「野蛮」と考えられつづけたのである。

そして、日本では、「文明開化」の名の下に、急激な西洋化的「近代化」が進められ、そのごの曲折を経て、現在に至った。そこには、結局のところ西洋化しえない日本社会の特質が露呈している。これに対して、中国では、清末の「衰退」のなかにおいても、中国的な社会秩序の維持の問題が、終始最大の課題であった。そして、そのような社会秩序の特質が、今後、新たな歴史的役割を担う可能性が議論されている。本書は、歴史を考える格好の刺激剤であるといえよう。